

スーパー読者の
経営力が選ぶ

あの商品この技術

27

新しい技術に積極果敢に取り組みが、決してポイントを外さない。新しい技術の調査のためには、海外へも足を運ぶ。その際、各種装置の理論よりも、その効果だけを直視してきた。その行動力と目利き力が、會田氏の強みである。

會田清氏は、茨城県において水耕栽培導入のさきがけ的な存在である。もともと同地での導入実績はなかったが、自らの中長期的な経営ビジョンに適合していると考え、決断したという。1984年に650㎡からスタートしたミツバを主とする水耕栽培は、その後段階的に拡張し、現在は1950㎡に至っている。

會田氏の基本的な考え方は、個々の設備に対してコストの削減にこだわる一方、革新的な技術を導入することによって、総合力をレベルアップするというものである。そのためには海外の展示会にも出向いて最新の栽培技術を調査し、導入実績が少ない段階でも、効果があると思えば即座に導入してきた。

水を酸性とアルカリ性に電氣的に分解する「電解水」製造装置の導入も早かった。酸性水は殺菌効果があり、消毒・防除のためハウス内の灌水などに使用している。一方、アルカリ水は肥料の吸収効率を高めるといわれ、水耕溶液に混入して作物の発育促進に利用している。これらの



茨城県坂東市
(有)猿島水耕

會田 清氏

【経営データ】

■面積／ハウス1950㎡。全面積水耕で、ミツバ(1550㎡)、ミニホワイトセルリー(400㎡)を栽培。■労働構成／社員は、奥さんの里美さんと叔父の會田久生さんを含む計5名。さらに常時7名のパートを雇用。■取引先／一部JAのほか、市場、小売店、外食産業への直販。

※■の数字は資料請求番号です



法人名の「猿島」はももとの町名。2005年に岩井市と猿島町が合併して坂東市となった。導入している水耕栽培のシステムは、すべて「新和NS方式」である。栽培ベッドは可動式ではないが、導入コストが安い。作業用通路も省き、施設面積の効率を優先させている。



最初に導入したホシザキ製の電解水生成装置①(写真上)と、2機目のアイ・ウォーター社製「トラジカル」②(写真右)。酸性水は病院や食品加工場などで、消毒、防除、殺菌などの用途に利用されている。會田氏の場合、種子消毒や施設内の防虫防除、出荷時の殺菌などに利用している。厚生労働省で食品添加物として認可されているので、安全性の問題はない。アルカリ水は作物の発育促進に利用しているが、葉面の色つやが鮮やかになるだけでなく、出荷後の鮮度保持にも効果があるという。





細霧ノズル「クールネット」⁶³もネタフィム製。このように會田氏のハウスでは、イスラエルの灌水資材が随所に見られる。電解水との併用効果で散布する農薬の効果は向上し、使用量が減少した。



この灌水システム（ネタフィム製「アクアネット」⁶³）は、3～4 kg/cm²の水圧で細霧を発生させることができ、コンプレッサーやステンレス配管の必要はない。そのため、導入コストは国産メーカーの製品の半額程度に抑えることが可能。コントローラー（ネタフィム製「ミラクルプラス」⁶⁴）によって自動化することができ、複雑なプログラムにも対応する。これらは、會田氏がイスラエルの展示会にまで足を運び、見つけてきたものである。



主力商品のミツバに加え、新品种「ミニホワイトセルリー」（タキイ種苗）を導入している。その名の通り、葉柄が白い。味や香りはセロリである。低温に対する抵抗性が強く、加温のための費用を削減することができた。各商品とも「香ちゃん」ブランドとして出荷されている。



會田氏は、このイスラエル製ポリエチレンパイプの配管を気に入っている。塩化ビニールを原料としたVP管に比べて柔軟性があり、手作業だけで設置することが可能である。さらに太陽光や塩水、酸とアルカリ溶液、肥料などの耐久性に優れており、かつ費用が安い。



効果で作物の収量や発育状態が向上し、結果的に農薬の使用を減らすことにもつながった。現在は既に2機目の装置も導入している。

また、ハウス内の灌水システムには、イスラエル製資材を導入。栽培ベッド上におよそ120 cm間隔で細霧ノズルを設置した。電解水をムラなく散布し、その効果を高めることによって、それまで手作業で行っていた防除作業を省くことが可能になった。総合的に判断すれば、これらの投資コストは短期的に回収できたと考えている。

総合力という視点は、種苗にもつながっている。通常、品種の選定は食味や耐病性、市場での評価を基本に決める経営者が多いが、會田氏の場合は違った。

昨今の原油値上がりに対し、加温が必要な施設園芸農家は様々な対処を施しているが、會田氏は低温に強い「ミニホワイトセルリー」を導入し、加温のコストを削減しているのだ。栽培面積はハウス全体の2割程度であり、まだ消費者の認知度も低い品種であるが、新野菜として注目されつつあり、今後の消費拡大が期待されている。

無駄なく総合力をアップし、ポイントを外さない。これが會田氏の経営力である。（農援隊 後藤芳宏）